

一文字三星

神村ふじを

原稿に向き合ったときに、コロナから書き出してしまう自分にうんざりしてしまう。が、教育委員会に勤める身としては、コロナの感染状況が気になってしょうがない。

山形県の9月15日現在の感染状況は、新規感染者が7名で県内累計感染者数は3450名となった。

全国的に見ると、東京都を含む13都府県に出されている緊急事態宣言、16道県に出されているまん延防止等重点措置が9月30日まで延長されることになった。

小中高校生の発症は約3割に上り、学校や放課後児童クラブでクラスターが発生している。急速に若い世代に感染が広がりを見せているので、気の抜けない日々が続く。

明るい話題がない中で、何かぞくぞくするような話題はないものかと探していたら、来年のNHK大河ドラマの収録が進んでいるというニュースを見つけた。

何でも題名は「鎌倉殿の十三人」。脚本は三谷幸喜というのだから、「真田丸」以来ということになる。今回も楽しませてもらえるに違いない。

今回のドラマの主人公は、鎌倉幕府の二代執権北条義時。野心とは無縁だった義時が源頼朝との出会いをきっかけに政治の表舞台に登場し、武士の最高権力者へと上り詰めていく姿を描く。主演は小栗旬。コロナ禍の中にあつてこのわくわく感は大事にしたい。

「鎌倉殿の十三人」は「鎌倉十三人衆」のことで、源頼朝の死後に発足した鎌倉幕府の集団指導体制を意味し、構成メンバーは大江広元おひろもと、三善康信、梶原景時など公家、武将合わせて13人。1225年（嘉禄元）に設置された評定衆のもとになったとされる。

鎌倉幕府において、政所の別当であった大江広元は重要な位置を占めている。ここで大江氏と我が町大江町のことを記してみたい。

私の住む山形県大江町は、1959年（昭和34）8月に左沢町あてらざわと漆川村うるしかわが合併して誕生した。合併するにあたって、新町名を大江町にしたが、この「大江」には二つの意味があったと言う。

漆川村の山々から流れ出る小河川が左沢で最上川に合流し、大河となって日本海に注ぐ。その勢い盛んな様をイメージして「大江」という字を用いたことが一つ。源頼朝が鎌倉幕府成立に功あった大江広元にこの地（寒河江さがえのぼた）を与えたため、大江氏の支配の地ということで「大江」としたことが二つめの理由である。（新町名の命名を依頼された当時の安孫子藤吉知事は、合併申請書の申

の新町の名称及び選定の理由の中で、前者が本義であるとしている)

1189年(文治5)、奥州藤原氏が滅びると、関東の御家人が各地の地頭に任命され、大江広元に寒河江荘が与えられることになった。

大江広元は、源頼朝の側近として重用され、鎌倉幕府の中心的存在だったため、実際に寒河江荘で地頭の役割を果たしていたのは、広元の妻の父多田仁綱たのりつなであった。

1219年(承久元)、鶴岡八幡宮において、鎌倉幕府三代將軍源実朝が二代將軍頼家の遺児くきょう公暁に暗殺される事件が起きる。

広元の嫡男親広ちかひろは、弟時広らとともに参拝の先導役を務めていたが、その責任を取って即刻出家している。

しかし、幕府はまもなく親広を京都守護職に任命し、実朝の死後、幕府との対立が見え始めた後鳥羽上皇を牽制する役目を担わせていた。

1221年(承久3)、後鳥羽上皇が討幕の兵を挙げる(承久の乱)と、親広は上皇から「鎌倉方であるか、味方となるか」と迫られ、やむなく上皇方に加わったと言われている。

この時、父広元と親広の子佐房すけふさ、弟時広は鎌倉にあり、幕府側についている。

頼朝の妻北条政子を中心に幕府の重臣たちがひと固まりとなり、防御の陣を敷くよりも京都に攻め入る方が得策との決定がなされた。

親広をはじめとする上皇方が宇治川で幕府軍を防ごうとした瀬田の戦いで、上皇方の劣勢が決定になると、親広はわずかな家臣とともに、近江の関寺からおそらく若狭か越前に出て、日本海を北上し出羽に入り、最上川を遡って寒河江荘に來たとされている。(寒河江市史上巻)

それ以来、最上氏に滅ぼされる約400年もの間、大江氏が本町の大部分が含まれる寒河江荘を支配することになる。

大江氏の家紋は「一文字三星」。「渡辺紋」と呼ばれるポピュラーな紋の「一」が頭に上がったものである。

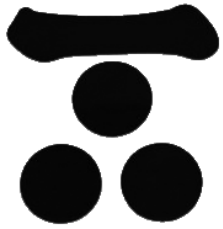
「一文字三星」の「三星」は、古来、日本にあった星に対する信仰に基づくものであり、オリオン座の中央に並ぶ三つの星(大將軍星と左右の將軍星)をデザイン化したものと考えられている。

また、「一文字」は、数詞のはじめの文字であることから、位の高さを示していると言われる。

時代は違いますが、長州の雄毛利元就もうりもとよなの家紋といえ、一の字に三つの丸、いわゆる「長門三ツ星」であり、大江氏の紋と同じである。

「矢も三本集まれば折れない」という三本の矢の有名なエピソードがその由来だと思われるが、実際はそうではないらしい。

というのも、元就の時代には、すでに家紋として用いられていたという理由からである。それに、亡くなる直前、嫡男の隆元ら三人の子を枕元に



呼び寄せ、一本の矢では軽く折れるが三本の矢を束ねたら容易に折ることができないと論じたといふ逸話そのものが、すでに隆元が早世していたことからして事実とは異なっている。

ただ、元就自身は、一族が結束すべきことを遺言状で述べており、三矢の教えは、そのようなことをヒントにして後に創作されたものというのが大方の見方である。

毛利氏の家紋と大江氏の家紋が同じ。どのような理由からなのか調べてみたくなり、痛快なことに毛利氏の家系をたどれば一目瞭然であった。

大江広元の四男の季光は兄たちと同様に父広元から所領を受け継いでいるが、その受け継いだところが相模国愛甲郡毛利荘（現在の神奈川県厚木市毛利台周辺）であった。

季光は1247年（宝治元）、宝治合戦（執権北条氏と有力御家人三浦氏の対立抗争事件）に際して、三浦泰村に与して三人の息子とともに敗死。しかし越後国佐橋荘（現在の新潟県柏崎市）と安芸国吉田荘（現在の広島県安芸高田市）を所領とした季光の四男毛利経光は、この乱に関与しなかったため、その子孫が越後毛利氏と安芸毛利氏となり、それぞれに分かれて存続した。

安芸毛利氏は、経光から吉田荘を譲与された四男時親が、南北朝時代の初期に吉田郡山（安芸高田市吉田町）に移住して居城を構えたのに始まる。吉田荘に移った安芸毛利氏は、室町時代に安芸の有力な国人領主として成長し、山名氏および大内氏の家臣として栄えた。戦国時代、毛利元就が出ると一代で大内氏や尼子氏を滅ぼしてその所領を獲得し、最盛期には山陽道、山陰道10カ国と九州北部の一部を領国に置く最大級の戦国大名に成長した。

このようなことから、大江氏の「一文字三星」と毛利氏の「長門三ツ星」が見事につながった。目から鱗である。

身近なところに大江を名乗る方々がいる。特に神社仏閣に関わっておられる方が多いのも特徴的である。その人たちは今も「一文字三星」の家紋を使っている。大江氏の庇護の下に、あるいはその後の最上氏との関係においても共生協調して生き抜いてこられたのだろう。

また、毛利さんも何人かいて、普通に一町民として暮らしておられるのだが、調べてみると家紋は「一文字三星」。「長門三ツ星」の流れを汲むかどうかは定かでないが、実に歴史の不可思議を目の当たりにした。今に息づく「一文字三星」の家紋であった。

参考文献…「寒河江市史上巻 原始・古代・中世編」（1994年5月、寒河江市）

大江町誕生60周年記念誌「ふるさと発見 大江」（2020年2月、大江町教育委員会）

大江町歴史副読本「ふるさとの歴史」（2001年3月、大江町教育委員会）